

シンガポール★スター

シンガポールで活躍するスターにしゅもん



[シンガポール☆スター](#) > 眞田一貫さん IKKAN ART INTERNATIONAL アートギャラリーオーナー

2016.01.24 (Sun)

眞田一貫さん IKKAN ART INTERNATIONAL

アートギャラリーオーナー

Q) 私が初めて眞田さんのギャラリーにお伺いしたいのが、teamLab がいらした2012年頃ではないかなと思います。

2011年5月にシンガポールにて画廊を開けて、その翌年の秋のニューメディア・アート展に、最新アートとして teamLab (プログラマ・数学者、建築家、デザイナー、アニメーターなど、様々なスペシャリストで構成されているウルトラテクノロジスト集団) の作品を展示しました。

それがteamLabとの付き合いのスタートです。

今から3年半位前になりますね。それから僕の画廊のプログラムも、随分変わりました。teamLabに影響されたということもありますね。

Q) 元々アートには詳しくないのですが、日本人のギャラリーオーナーの方がいるんだと、私でも耳にして、IKKAN ART INTERNATIONALのことを知りました。

初めてシンガポールに来た2010年ですが、その頃は、ギルマン・バラックス (Gillman Barracks) 画廊街があるわけでもなく、大きな画廊といっても、ショッピングモールの中にあるようなもの。

あとは小さなローカルの画廊でしたね。

僕はニューヨークから来たのですが、その立ち位置からみると、ここはまだ開拓する余地がある場所だな、そういうフロンティア精神みたいなものがありました。

Q) 新天地での開拓ですね。

ここにも画廊は、恐らく何十とあったと思います。

でも、僕にとっての開拓、未知の世界というのは、これまでニューヨークで扱っていたもの、アメリカやヨーロッパの戦後のアートを中心としたコンテンポラリーアート。

それから、100-130年前以降の巨匠の作品。

我々の世界では“物故作家”というのですが、そういった、いわゆる欧米主導で発展してきた美術市場で活躍しているアーティストを、シンガポール市場で紹介したり、販売したりすること。

その市場開拓に、意味があるんじゃないかなと感じたんですね。なぜなら、それを専門でやっているところがなかったから。

Q) ここには無いとはいえ、なぜ、シンガポールだったのですか？

僕は30年間近くニューヨークにいて、その前はパリ。

この美術の世界に入って、40年近く、そういう中できっかけとなったのが、僕が還暦を迎える年だったこと。自分が60歳を迎えるにあたって、自分は日本人、アジア人なんだということをより強く意識をし始めたことですね。

もうひとつの理由は、ニューヨークの美術市場も巨大化して、僕が始めた頃とは、質も大きく変わったんですね。

それまでは、芸術の波に乗っているだけではなく誰かの役に立っていた。画商だったり、作家だったり、アートコレクターだったり、何か誰かの役に立っているという実感があった。

ところが、ニューヨーク在住20年を過ぎたころから、美術市場の在り方そのものが変容してしまったんですね。

資本、お金偏重の世界になってきたんですね。

自分の強みを生かし、それをニューヨークでやるには、資本力がない。変容した世界で、自分のやりたいことをやり続けるのは、難しくなってきたなと思ったのです。

僕は、20歳の時に日本を出て、40年間という時を経てきて、この経験を日本やアジアで生かす方法もあるのではないかと思い始めたんです。

Q) 新しいチャレンジが、ここアジアなのですね。

2009年、そろそろニューヨークを離れようかなと思っていたころです。

それまで、自分の仕事とは別に、自分が好きなものとして集めていた最先端の現代アートのコレクションが幾つかあるんです。

1984年創刊の、バルケット (Parkett) というスイスの出版会社が出したマルチプルアートというのがあって、その本の初刊からの作品を、僕は全部持っているんですね。そういう買い方をするコレクターは、そういないんです。

普通、コレクターは自分の好きなものをコレクションするものですが、僕は、好き嫌い関係なく買っていたんです。なぜなら、持っているうちにひょっとしたら好きになるかもしれないし、みな若手作家でしたので将来がわからない。そのわからないというのは、自分が勉強不足でわからないだけかもしれない。そう思って、全部買っていた。

そんな時に、バルケット社から創刊25周年記念の展覧会に協力してほしいとご連絡を頂いたんです。それで、新たにバルケットと共同で全作品を網羅した本も日本で出版して。金沢の21世紀現代美術館で現代アーティストたちのコラボレーション25年という展覧会を開いたのです。

その展覧会の初日にシンガポールのギャラリーSTPI (Singapore Tyler Print Institute) のDirectorのEmi Euさんがいらして、その200点の作品を見て、とても驚かれて、ぜひ、シンガポールでやりたいのだけとお話を頂いたんです。丁度、STPIのコンセプトに合ったのでしょう。これがきっかけで、2010年にSTPIでバルケット展を開きました。

その時、初めてシンガポール美術界を知ったんです。

一人あたりのGNPが日本を抜き、富裕層がたくさんいるこの国だけど、文化、アートの世界のギャップがあるんだと、不思議に思った。だから、そういうアートを自分が持ち込んだら、新しい市場が出来るんじゃないかと思ったんですね。それは早とちりだったんですけど（笑）

そして、2011年の5月に倉庫街の中に、ギャラリーをオープンしました

Q) 出会いの流れで、シンガポールにいらした感じなのですね。

僕の人生いつもそうなんですけど、なにかそういう糸が繋がっていくんですよね。僕が突然シンガポールに行こうと思って、ここに来てリサーチして設立したわけではない。

人生にはタイミングがある。

良いか悪いかはわからないけど、STPIで展覧会をやったことで、シンガポールを見る機会を得たし、東南アジアで一番大きな美術品を保管する会社との出逢いなど、色々な人との出逢いがあったから今の僕があるんです。最初の展覧会は、力を入れて戦後の現代アートの歴史を振り返るような、出来るだけ良い物を集めた豪華な展覧会にしようと思ったんです。ジャクソン・ポロック (Jackson Pollock)、アンディ・ウォーホル (Andy Warhol) とか草間彌生、村上隆などのアーティストの代表作をたくさん持って来たんですよ。

それは、おそらく過去にシンガポールで展示されたことがない規模の大きな展覧会だったと、今でも僕は思っています。勿論、それは経費も凄くかかってビジネス面では全く (赤字) だったんですね。

Q) まだ、ギャラリーを知らないですね。

ニューヨークから来た画廊ということでザ・ストレーツタイムズ (The Straits Times) とか新聞各社がスクープしてくれたんですけど、結果的に展覧会は大赤字で終わったんです。

石の上にも3年ではないですけど、新しい所に来て、すぐに結果が出るものではない。

とはいえ、売れないことがわかっているから経済的にも精神的にも、続けられない。では、どうやってシンガポールに留まったらいいかなって考えて違ったプログラムを見せるのがいいかなと思って。ただ有名作家の作品を持って来るだけではなくて、この人が味わったことがないアートを経験してもらおうのがいいなと思ったんです。

例えば、森村泰昌というアーティストがいて、彼は、セルフポートレートの作品を作ります。著名な絵画の中に描かれた人物、例えば、ゴッホの自画像そっくりに変装をして、その格好で写真を撮ったりなど、1980年の半ばからやっていた。三島由紀夫の演説を真似て、その格好して語るビデオを撮ったりしている。

三島由紀夫が日本の政治を語った様に、森村はその語りの抑揚をそっくり再現し、日本のアート界に対して「西洋アートにいつまでも迎合していいのか？日本にある伝統に、目覚めよ」って、語った。そのパフォーマンスを記録映画風に作品化しているのですがそういうビデオ作品だけを集めた展覧会をやったんです。

ある一部の人にはとても評判だったのですがこれも大赤字でした。

Q) でも、話題性としては凄かったのではないですか？

とても凄かったです。

それまでにない良い展覧会だと思いました。アーティストご自身も、とても喜んで下さいました。そこで、もうとにかく、売ることを考えて展覧会をすることは、やめようと思ったんです。

自分が楽しむこと、そして大勢の人に向けてやるんじゃなくて、ほんの一部でもアートのクオリティが分かる、数少ないコレクターに向けて、やっていこうと思ったんです。そういうことで、少しはここシンガポールの美術界に貢献できると思ったんです。

Q) 言い方が良くないかもしれませんが、どこか教育していくという感じですね。美術を伝えていく様な。

啓蒙ですね。そういう思いもありましたね。ここで商売だけを考えていても長続きしないなど。

ここで自分が役に立てることは、ここの人達にクオリティの高いアート作品を見せていくこと。きっと役に立つだろうなど。その見せ方は、非常に個人的な、一方的な好みを押し付けてはいるんですけど、自分の画廊だからいいかなと思って。そのかわり、損をしても自分の責任。そういうこともあって、もっと新しい世界、デジタル、ビデオアートを見せる展覧会で世界にはこんなアート表現もあるんですよということも見せたくて。

自分がニューヨーク時代から持っている作品で展覧会を企画して見せることにしたんです。

ところが1990年～2000年の作品ばかりで、シンガポールの人にとっては新しいけど、今（の作品）がない。いくらなんでも、15～20年前のものばかりではと思って。

じゃ、「今を見せる」ってなんだろう？そう考えたとき、 teamLab だったんです。

機会があって、猪子寿之さん（teamLab 代表）と会って、初対面だったんだけど色々話していくうちに、teamLabの個展になるんじゃないかなって思うほど彼らの作品の展示の仕方に力を入れました。

その頃の teamLab は、まだアーティストとしての知名度もなく、シンガポールのコレクターも、美術館関係者も名前を初めて耳にするし、見るのも初めて。後にその展覧会がきっかけとなってSAM（Singapore Art Museum）のキュレーター達が何度も足を運んでくれて結果、シンガポール・ビエンナーレ（世界中から美術作家を招待して開催される展覧会）出品に繋がって行ったんです。

それと、毎年1月に行われるアートステージシンガポール（アートフェア）でteamLabの作品を展示したんです。そしたら、初日に完売してしまいました。その翌年にはもっと広いブースで行いその時の評判もとても良かったです。

SAMでやったビエンナーレの作品は、巨大な空間の大作なので、本当に今まで見たことのない新しいタイプのアーティストだと、世界にアピールすることが出来たと思います。

Q) 元々眞田さんがギャラリーオーナーになったきっかけは、どんなことだったのですか？

僕は岡山市生まれなんです。どちらかというと貧しい、サラリーマンの家庭で育ち、親や学校の期待としては、国立の大学に入って落ち着いた生活をして欲しいと思っていたんですね。

ご存知ない方が今は多いと思いますが、1968年、世界中で学生運動が起こったんですね。大学を受験する頃に東大安田講堂事件があって、親の学生運動に無縁なところという思いもあって、結果、慶應義塾大学に入ったんです。

東京でアルバイトをしながら、下宿生活してました。

大学の2年になっても、学生運動の影響で授業もあまりないので、お茶の水にあるアテネ・フランセに通って、フランス語を勉強していたんですね。そこの先生の勧めもあって、フランスに行きたいという思いを描き始めたんですね。

その為には、お金を貯めなければならない。如何に生活費を減らすかを考えて、さらに、バイトを掛け持ちしている生活だったんです。

そんな中でも、好きだったのが映画なんです。年間300本位映画を見るそのお金だけは使っていました。

たまたま、実験映画をやる映画館で、16mmの映画作品に出逢ったんです。その映画のタイトルが「手」という作品で

第一回監督作品と書いてあって。その映画にあまりにも感動したので、監督さんに感想文を書いたんです。

観賞後すぐ目の前にあった喫茶店に入って2時間位、長々と10枚くらい。

それを持って、また映画館に戻って、受付の方に「監督さんに渡して下さい」って置いていったんですよ。（笑）滅多にそんなことをするタイプではなかったんですが、よっぽど感動したんでしょうね。自分の下宿先の住所と電話番号を書いて置いていったんです。

そしたら2～3日後、夜の11時近くに、その監督さんから電話がかかってきたんです。

Q) 凄い～！その監督さん本人から？

「僕の映画を気に入ってくれたんだって？ちょっと話をしたい。これから来ないか？」って、言われたんですよ。「オレの家、どこか知っているでしょ？」って言うんです。知らないって言ったら「君、ファンじゃないの？」って。ファン？何を言っているんだろうって思って（笑）「じゃ、渋谷駅まで車向わせるから」って家に連れて行かれたんです。

で、その監督というのが萩本欽一さん（コメディアン、タレント）だったんです。

Q) え～？？欽ちゃん？その映画監督さんが、萩本欽一さんだったのですが？

そうなんです。コント55号の萩本欽一さん。その人の作品だと思ってなかった。（笑）

Q) 映画の監督名には、書いてなかったのですか？

いえ、萩本欽一と書いてありました。でも、その時は、コント55号の欽ちゃんとはわからなかった。下宿先にもTVがないし、実は、コント55号のことさえもほとんど知らなかった。（笑）

Q) え～（笑）面白いですね。

それでね、呼ばれたのも夜遅かったんだけど、ふたりきりで朝方まで映画の話をして。僕が貧乏学生であることを知った萩本さんが、「家の2階に3畳間が空いているからそこで良かったら来たら？」と、言ってくれたんです。

僕は図々しく、本当ですか？って（笑）1週間後には居候として住み始めたんです。

Q) 住み込みですか？（笑）

住み込みというより、居候ですよ。

芸能界は、全く想像出来ない世界で、僕とは生活の流れが違っていましたが、萩本さんは貧乏学生の僕を置いてくれたんですね。おかげで僕は、フランスに行くお金を貯めることができ、大学を中退して、二十歳の時パリに行ったのです。

当時、国外へ持ち出せる外貨は、1000ドルまで。1000ドルとは、36万円の時代。僕は28万円位しか貯められなかったけど、見切り発車しちゃったんです。

当時、一番安い行き方は、横浜から船に乗って、ナホトカ（ロシア）に行き、そこからシベリア鉄道でフランスへ行くという方法。1971年、もう冒険というか、無謀というか帰ってくるお金も無いわけです。

28万円から行き交通費を払ったわけですから、パリに着いた時に、もう帰るお金すらない。

Q) 本当に、ただ行ってしまっただけなんですか？（笑）

そうです。学生ビザを取って行っただけです。

行く前はみな、必死で止めましたね。

Q) 欽ちゃんは、行かれる時なんて言ったのですか？

僕はね、今まで欽ちゃんって呼んだことはなくて、僕にとっては、常に「萩本さん」なんですよ。

僕が学生でいる間はいいよって言ってくれたんですよね。「決してオレの生活に影響されちゃいけないよ。お前は学生なんだから、学業をしろ」と。全く二人きりの生活だから、彼にしてみると僕は人生の弟子。

若い学生を面倒見てやろうという思いでいてくれた。

でも、道を誤ってはいけないから「学校に行かなくなった時には、ここを出てもらうよ」って言われていたんです。こんな萩本さんの思いがあったのに僕は、フランスに行くことを決意して、その為に大学を辞めて、アルバイトして準備を始めた時にその事を話したんです。

僕の話聴いて、萩本さんは驚いたと思うけどこう言われたんです。「一貫、お前が明日から東京駅で靴磨きをやりたいって言っても、オレはお前をここに置いてやるぞ。お前が、色々考えて自分の将来の道を決めたんだから、その道に進んで行け。ここからパリに行けばいい、応援する」って、そのまま置いてくれたんです。実際にパリに出発するその朝まで、萩本さんのお宅でお世話になりました。

さらにその時に、萩本さんはこう話を続けてくれたんです。

「いずれ自分の人気が消えて、世間から忘れられていく時が来る。お前は、パリに行ってやりたいことをやればいい。お前がひとかどの人間になった時にそういえば、東京にいた時に萩本欽一って男がいて、世話になったなって、そう思い出してくれば、オレは草葉の陰で泣くよ」って言ったんですよ。

Q) じ〜んと、来ますね。

その言葉が、ずっと励みになって今までやって来れたんです。

実際には、萩本さんはコント55号を解散して、寧ろ、“欽ちゃん”になってから国民的スターになられて、人気も上がってご活躍していますけど。

Q) もしかしたら、眞田さんを通して、萩本欽一さんはどこかにご自身をみていたのかもしれないね。

自分の事を思い出させるくらい、貧乏で、それでも勉強したいという思いでいて。ましてや、急にパリに行くなんて言い出したりしてね。面白いやつだなんて思ってくれたんじゃないかな。

萩本欽一さんは、僕の人生の恩人ですね。

そんなことがあって、1971年の6月にパリに着きました。学生ビザがあったので一応滞在資格はあったのですが、あまりにも物価が高すぎて。

Q) 1000ドルじゃ、ひと月持つかって感じですよ？

パリで生活するのが目的だったので、学生というよりは何かしないと、なんとか稼ぐ事を考えないと、生きていけないと思ったのです。

Q) その時は、フランス語は話せたのですか？

アテネ・フランセでの猛勉強のおかげで、語彙は少なかったですけど、聞き取ることと、自分の知っている言葉で思いを伝えることは出来ました。それが幸いして、仕事にありつけたんです。

その仕事というのが、パリに日本から進出したばかりのアートギャラリーだったんです。そこが、僕のアートとの関わりのスタートなんです。

日本から進出した、オーナーが日本人のアートギャラリーに、求人はしていなかったのですが、何でもするので雇ってくださいと押しかけて行きました。

Q) へえ～、面白いですね。（笑）

「うちは、アルバイトはいらない」って言われて、それでは正社員で雇ってくださいと言って。

（笑）無理矢理に入り込んだというかそうしないと、食えないから。（笑）

Q) 必死ですよ。（笑）

何度か断れながらも、自分はフランス語を話せるってアピールをして。じゃ、受付（電話交換）をしてみろ」ってテストされたんです。

電話をかけて来た誰もが僕が日本人と気付かず、その事にオーナーも驚いて「じゃ、雇ってやろう」ってことになったんです。でも、最初は経理をやれと言われたのです。僕は、算数、計算が苦手で……。

Q) しかも、フランス語ですものね。

「お前、経理やった事があるか？」って聴かれてハッキリ、算数は嫌いですって言ったんです。でも、これで断っちゃったら、せっかくの仕事が無くなる。

なので「フランス語で経理するんですよね？それならフランス人の会計士から、教えて貰いたい。一週間僕に特訓してくれたら、覚えます！」って、言ったんです。

実際にフランス人の会計士が来て、朝から晩までフランスの経理を教えてくれたんです。

Q) 苦手なもの、しかも教えて貰うといってもフランス語で？

それしか僕を生かす手が無かったと思うんですよ。

だから、求められることをやる。私は、これをやりたいんです、やらせてくださいではなくてこれだったらいいよって与えられ、言われたことをやる。こちらがそれに合わせる。知らないことは勉強する。

経理をやり、銀行業務を覚え、輸出入手続きを覚え、取引、貿易を覚え、そうやって段々画廊が動いている中枢はどうなっているのか、経理をやっていると全部わかってくる。結果的に6年半、その画廊にいました。

Q) 6年半、画廊のノウハウを覚えて、でもまだ26、7歳くらいですね。

日本から来た画廊と先程申しましたけど、日本が本店、パリが支店だったのですが、そのトップが交代することになったんです。日本のトップが、パリへそして、パリのトップが日本に帰国する。

その時に、パリでトップだった方に「一緒に日本へ戻って仕事をしてくれないか」と言われたんです。

パリに骨を埋めるつもりでいたので、そんなことを言われて、え？と思ったんですが、この方も、萩本さんに次いで自分の恩人中の、恩人。そうやって僕を頼ってくださり、これまで、僕を引き上げてくれて、職を与え、色々なことを教えてくれた方なので、一緒に行きますって、フランスを引き払って、帰国したんです。

結局は、後にその方と一緒にその画廊を辞めて、新しい画廊を設立したりなどしたのですが、それもなんだかしっくり来なくて。まだ自分は28歳の頃。

Q) そうですよ。元は、パリに行きたいと思ってた居たのに。

恩返しもしたし、やっぱり自分はパリへ戻ろうかなと思い始めたんです。

そんな頃、世界的に有名なオークション会社サザビーズ (Sotheby's) の日本進出のオープニングパーティー会場で、当時、サザビーズの部長だったイギリス人に再会したんです。パリに戻ろうかなって話をしたら「もうパリじゃないよ、これからはニューヨークだよ。これからの美術品取引の中心はニューヨークだよ」って「君もニューヨークに来るべきだ」って、言われたんです。

でも、ニューヨークには誰も知人がいないからなって言ったら「僕が居るじゃないか」って！

Q) 眞田さんの人生は、必ず助け人が現れる。

そうなんです。そのサザビーズのイギリス人も「なんのあても無くアメリカに行ったんだよ」って言うんですよ。

なるほどそうかって思ったんですけど、考えたら僕は英語が出来ない。今度は、美術商としてニューヨークに行く、だったらちゃんと英語を勉強しようと学生ビザで1980年に行ったんです。

2年間、英語と美術の勉強をして学生として過ごしました。

そして蓄えも尽きて、仕事をしなくてはと思って、1982年10月にニューヨークで自分の会社を設立しました。

Q) なぜこの時は、どこかに勤めるのではなく起業だったのですか？

誰かにお世話になるというか、昔の言い方でいうと奉公するのはやめようと思ったんです。苦勞しても、自分に返ってくる方がいいなど。

これまでパリでの仕事で勉強させて貰ったけど、自分だったらこうしただろうなと思うこともあって、新しい場所で、新しい挑戦をしたかったんです。だから、ニューヨークでは、それまで自分がやっていたフランスの現代アートは取り扱わず、戦後のアメリカンアートを取り扱い始めたんです。とはいえ、そんなものをやっても、誰も買う人は日本にいないって、日本の画商たちから言われたんです。

ジャスパー・ジョーンズ（画家）など、欧米ではよく知られていても、日本では取り扱う画廊が少なかったから、知られていなかったのに。それで、戦後のアメリカンアートを取り扱うことを始めたのです。

Q) シンガポールにいらした時の思いと似ていますね。新しいところで、新しい挑戦

そうですね。ニューヨークで始めた当初はそれまでにご縁があった方々に、今はニューヨークで仕事していますが、何かお手伝い出来ることはありませんかとお声掛けしたんです。

じゃ、今度のニューヨークでのオークションに欲しい作品があるから調べて欲しいとか依頼されたことをお手伝いする中で、少しずつこちらから、ルノアール、シャガールもいいですけど、これからはアンディ・ウォーホールや現代アートの時代ですよとお勧めしました。

そうこうしているうちに80年代終わりになって、日本はバブル。美術品を買い漁る時代がやって来たんです。ニューヨークにいて日本の美術市場の大変化を体感したんですね。

Q) これまでの人生を色々とお伺いしていて、本当に人から人のご縁の人生だったように思いました。

自分で独立するまでの人生を振り返って、自分が一番得た事はどんなことだと思われませんか？

まずは、何をやりたいかってことをブレないで持ち続けることが大切だなって思います。引き上げて下さる方がいるから、そこに行くとしても、まずは自分の立ち位置、何をしたいかということを持っていることが大事でしょう。そこでチャンスを掴むってことですね。

もうひとつは、人とのつながりを大切にということ。

岡山から東京に出て来たときも、父の勤めていた会社の社長さんが奨学金を特別にくれて、その社長さんがご紹介してくれたお宅で家庭教師をしてました。その生徒さんのお父さんが画商で、後に僕がニューヨークにいた時に、僕のお客様になって下さったんです。

Q) 家庭教師をしていた頃は、画商になろうなんて思っていない頃ですよ？その時はわからないけど、出逢いは、全部繋がっていたんですね。

画商になろうとは、全く思ってなかったです。

その画商の方がニューヨークでの僕のお客様になってくれて、また、その方からご縁も広がっていく。そうやって、出逢う人は全部繋がってくる。（人生で出逢った）どの人ひとりが外れていても今の僕はいないんです。

萩本欽一さんがいなければ、パリには行けなかった。パリの画商さんがいなければ美術の世界とは縁がなかったし、パリにい続けるということはできなかった。その方に請われて、半ば嫌々日本に帰ってきたんですけどそれで日本の現状を見たことが、後に役に立っているんです。

その後、世界の現代アートが日本で流通する、バブルの時代がやってきて、アメリカから日本に欧米の絵画を販売しました。バブルが弾けた後は、今度は逆に、日本から絵を僕が買い戻して、アメリカやヨーロッパのお客様にお世話するという仕事もしました。

Q) なるほど、一度買って下さった絵を買い戻す。

値段は変わっても、絵の素性が分かっている一貫に任せれば安心だと、お客様が考えてくれたんでしょう。

こうして幸いにして僕は、欧米と日本の双方のお客様のお手伝いをするという仕事が出来たんですね。
人と人のご縁はそうやってずっと繋がっているのです。

Q) 眞田さんの人柄に引付けられているんですね。

いや、自分ではわかりませんが。

僕は、非常にラッキーだったと思いますよ。いわゆる強運なんだと思う。僕は普段から、性格的にも、否定的なことはあまり考えない。嫌なことがあっても、寝たらすぐ忘れるタイプです。

Q) そうですよ。パリで何度も断れても働かせて下さいって。ココロ折れちゃう。(笑)

折れるも何も、そうしないと飢え死にしますから。

当時、僕のような状況で、せっかく入った大学を辞めて、パリにひとりで行くって人はほとんどいなかったですね。
みな、「せめて大学を出てからにしたら」と説得してきました。

でも、当時の僕は二十歳前。2年も3年も待っていたら世の中どうなるかわからない。今、行かないと手遅れになるって思い詰めていましたね。2、3年も経ったら、大勢の人がパリに行くようになる。待ってちゃいけないって。僕は、人がしないことをするのが好きなんです。

Q) 開拓者ですね。

そういうことをいつも思っていましたね。東京にいて、フランス語の勉強だけしていても駄目だ。西洋の文化、芸術に強い憧れもあって、パリに行って空気を吸えば、自分が変わるんじゃないかって思っていた。

過去の芸術家達が、みなパリに向かっていったのは、パリには、世界中から来た芸術家を育てる土壌があったから。その当時とは時代は変わっているけど、自分もパリの環境に身を置けば、そこから何か自分にも生まれるんじゃないかって思っていた。

Q) 眞田さんにとって、芸術とはどういうものだと思いますか？

僕にとっては、人として生きて行く為の生き甲斐であり、力を与えてくれるもの。

古いアートを見て心落ち着くこともあるけど、僕の場合は、新しいアート、知らないものに触れる時、知らないだけに、凄くインスパイアされるんですね。

そういう革新的な力を持ったものが好きですね。teamLabは、まさにそういうものだった。それによって、常に自分の精神状態が若返っているというか、常に前向きであり続ける。

芸術が無かったら、そういうことはないでしょうね。

どんな世界でも同じで、伝統芸術でもお茶でも同じなんです。何百年も続くものは、それを担っている人達は、最新にチャレンジしているわけですよ。ただ古いことを続けていくだけでは、朽ちてしまう。そういうもんだと思います。

Q) 受け継がれるというのは、新しく生んで行くことなんですね。

常に芸術の中にある、そのチャレンジする精神というものが、人間を前に進めているエネルギーだと思います。新しい科学で新しい理解は進むのですが、科学だけでは多分、成り立たないんですよね。

ダビンチは、科学者であり芸術家でした。

アートとテクノロジーは500年以上も相互に影響を与え発展し続けている。科学で解決できないものは、芸術の中にヒントがある。その逆もあるんですけど。

Q) 科学的なそれは、ひとつの見方ですものね。それだけではない。

人間を取巻く世界で、未知なるものを理解したいという、好奇心。

未知なるものを理解するには、科学的な理解と、芸術的理解が必要で、その好奇心が人を前に行かせる。それがまさにアートを持つ力じゃないでしょうか。僕にとってはそうですね。

だから、ニューヨーク時代にシャガールを売っていた時にも、超前衛アートを集めていたんですね。一番新しいものからインスパイアされたくて。

Q) 素敵な物語。眞田さんがインスパイアされて、コツコツ集めていたその新しいものが、ここシンガポールで、また新しいインスパイアの扉を開いて行く。

そうなんですよね。

Q) H SEEDSという活動をしているのですが、人生にはそれぞれ時く種があると思っています。そこで眞田さんは、この人生でどんな種を蒔いていると思いますか？

うん～、種を蒔いているという思いはないのですが。萩本さんが、彼なりに僕を育ててくれた様に、僕が若いアーティストの展示会をやったり若いコレクターでどのように集めたらいいかわかならいいという方達に、僕だったらこうしますよって、アドバイスしてきたことが種かな。

願わくは、それらが実になればいいなって思います。

Q) 若い人達がそれを咲かせていく

ここシンガポールで、僕の展覧会で見た作品が、その人に、なんらかのインスピレーションを与えられたら、それが種かもしれないですね。

Q) これからは、どんなことをやっていこうと考えていますか？

これからも自分のペースで好きなことをどんどんやっていく。僕が目をかけているアーティストたちが世界へ羽ばたくお手伝いが出来ればいいなって思っています。